2022 年度　佐賀大学日本語・日本文化研修留学生 修了レポート

伝統工芸有田焼の歴史と特徴・地域発展への価値

－ベトナムのバッチャン焼との対照－

学籍番号：21957001

氏名　：グエン・ティ・タイン・タオ

目次

1. はじめに
2. 有田焼　歴史及び特徴・地域発展への価値を中心に
    2.1.　有田焼とは何か
    2.2.　有田焼の注目すべき歩み
    2.3.　有田焼ができるまでのプロセス・主な表情を生む技法
    2.4.　有田焼の特徴
    2.5.　地域発展への価値
3. ベトナムのバッチャン焼　歴史及び特徴・地域発展への価値を中心に
    3.1.　バッチャン焼とは何か
    3.2.　バッチャン焼の注目すべき歩み
    3.3.　バッチャン焼ができるまでのプロセス・主な表情を生む技法
    3.4.　バッチャン焼の特徴
    3.5.　地域発展への価値
4. 考察
    4.1　有田焼とバッチャン焼の類似点
    4.2.　有田焼とバッチャン焼の相違点
5. おわり
    5.1　まとめと今後の課題
謝辞
参考文献

要旨

日本には世界に誇りを持つ古い伝統の工芸美術が多くある。その中で、陶磁器は重要であり、過去から現在まで繁栄して、国内に限らず世界にも知られている。日本では、美濃地区（岐阜県）瀬戸地区（愛知県）をはじめ、全国各地で豊かな焼き物があふれている。最初の磁器として誕生したのは有田焼である。ベトナムにも代表的な陶器・バッチャン（Bat Trang）焼がある。本研究では、有田焼及びバッチャン焼について歴史・特徴・地域発展への価値について解説した。それに基づいて両者を比較し、類似点及び相違点を探った。本研究で得られた結果をまとめると、次のことが明らかになった。有田焼とバッチャン焼の間に類似点が数多くあることがわかった。まず、両者は長く、輝く歴史を持ち、国の代表な焼き物である。国内の市場だけでなく、海外にも輸出されて、評価を得た。有田焼、バッチャン焼はどちらも多種多様で、日常生活に重要な役割を果たす。有田焼が生産された有田、バッチャン焼が生産されたバッチャン村は、生産地として観光地化しており、国内外から観光客が訪れている。一方、有田焼とバッチャン焼の間には相違点がある。一つ目は、有田焼は「古伊万里」、「柿右衛門様式」、「鍋島様式」という 3 つの様式に分けられることに対して、バッチャン焼は様式ごとに分けられない。また、文様が違う。バッチャン焼はベトナム風の文様があり、有田焼は日本独自の意匠がある。同じように中国から影響を受けたが、両国の陶芸家は自分の国の文化を合わせて、独自の焼き物を生み出した。グローバル化が急激に進んでいる世界では、他国の技術や文化を吸収、自国の価値観や文化を維持することが重要だと考えている。

キーワード：有田町、有田焼、焼き物、陶磁器、ベトナム、バッチャン焼

1. はじめに

佐賀大学に留学し、異文化交流の授業で「佐賀さがし」という活動があった。日本一の干満の差 6mを誇る有明海や佐賀を代表するお菓子である丸ぼうろをはじめ、佐賀県の魅力を探し、紹介するという活動であった。それをきっかけに、日本最古の磁器・有田焼に興味を持つようになった。ベトナムにも代表的な陶器・バッチャン（Bat Trang）焼がある。インターネットで調べたとき、両者は長く、輝く歴史を持ち、国の代表な焼き物であることがわかった。そして、国内の市場だけでなく、海外にも輸出されて、評価を得た。特に、有田焼はベトナムで発見され、バッチャン焼も日本で発見された。そこで、「有田焼とバッチャン焼は何か関係があるのか」という疑問が出てくる。これまでに有田焼、バッチャン焼についての研究が数多くあるが、両方の関係についての研究がない。そのため、本研究では、有田焼およびバッチャン焼について考察し、比較した上でその類似点および相違点を探る。具体的に以下の点を明らかにしたい。

① 有田焼・バッチャン焼の歴史・特徴・地域発展への価値は何か
② 有田焼とバッチャン焼の間には共通点・類似点があるのか。
③ 有田焼とバッチャン焼はどう違うか

ここで、本稿で使用する用語について以下の表で説明する。

表１：用語説明

用語	意味
素地（きじ）	陶磁器の表面。または釉をかける前の陶磁器の表面。
釉（うわぐすり）	釉薬（ゆうやく）、釉（ゆう）などともいう。素焼した陶磁器の表面をかける。施釉（せゆう）は釉をかけること。
絵付（えつけ）	陶磁器に文様などを描くこと。下絵付け、上絵付がある。
白磁（はくじ）	白色の素地に透明な釉を施した磁器。
染付（そめつけ）	素焼した白い色の器に、コバルトをふくんだ呉須という絵の具で模様を描き、その上に透明な釉薬をかけて本焼したもの。
色絵（いろえ）	透明な釉薬をかけて本焼した上に、絵の具で模様を描き、約 800 度の低い温度で焼いて仕上げたもの。
青磁（せいじ）	石の粉を原料にして形をつくり、鉄を含んだ釉薬をかけて焼いた器。鉄が色を出し、青や緑がかった色になる。
瑠璃釉（るりゆう）	本焼用の透明釉の中に、呉須を入れて作る瑠璃色の釉薬。

２．有田焼　歴史及び特徴・地域発展への価値を中心に

２.1.　有田焼とは何か

有田は佐賀県の西部に位置し、日本の磁器のふるさとと言われている。有田焼とは、佐賀県有田町とその周辺地域で製造され、400 年以上の輝かしい歴史を誇る日本の代表的な焼き物である。

日本の代表的な焼き物は土器、陶器、炻器（焼締）、磁器という 4 つの種類がある。それぞれの特徴は以下の通りである。

表 2：焼き物の代表的な種類

種類	材料	温度	特徴
土器	粘土	700～800℃	・吸水性がある ・光を通さない
陶器	粘土が主な材料	1100～1200℃	・吸水性がある ・光を通さない
炻器（焼締）	アルカリや鉄を多く含む粘土	1200～1300℃	・吸水性が少ない ・光を通さない
磁器	陶石が主な材料	1300℃	・吸水性がない ・光を通す

表 2 の通り、焼き物には土器、陶器、炻器（焼締）、磁器という 4 つの種類があるが、有田焼は磁器である。代表的な様式は、古伊万里様式、柿右衛門様式、鍋島様式である。

江戸時代に有田で焼かれた磁器は、伊万里港から船で各地に出荷されていった。そのゆえ、伊万里焼と呼ばれていた。明治 30 年（1879 年）有田に鉄道が開通し、有田から直接各地に出荷されるようになったので、有田焼と呼ばれていく。佐賀県だけでなく、日本が誇る優美かつ華やかな磁器とされている。

2.2.　有田焼の注目すべき歩み

有田焼の注目すべき歩みは以下の通りである。

表 3：有田焼の歩み

時代	年代	主な出来事
江戸時代	1610 年ごろ	朝鮮の磁器の技術者・金ヶ江三兵衛が有田で磁器の原料を発見した。そのことにより、有田磁器が生産されてきた。
	1610 年代～1650 年ごろ	「初期伊万里」が現れた。
	1637 年	磁器の生産体制が整った。

	1640 年	初代酒井田柿右衛門が有田で色絵を成功した。
	1644 年	中国の内乱（明から清へ王朝が交代）をきっかけに、有田は大きく発展した。国内の磁器市場を独占するだけでなく、海外の磁器需要にも応え、様々な器種、形、文様の磁器を作った。
	1650 年ごろ	中国の技術を導入し、優れた磁器を作る基礎を確立した。
	1650 年代以来	有田焼はオランダの東インド会社（略称 VOC）により東南アジアへの輸出が始まり、1659 年からさらにヨーロッパまで輸出された。大量注文があり、生産量は増大、有田が発展するようになった。
	1640 年 ～ 1660 年ごろ	「初期色絵様式」が現れた。
	1670 年 ～ 1690 年	「柿右衛門様式」が現れた。
	17 世紀後半	「鍋島様式」が現れた。
	1688 年 ～ 1704 年ごろ	「金襴手様式」が現れた。
幕末		有田は不況が続いていた。
	1828 年	大火に見舞われ、美濃地区（岐阜県）や瀬戸地区（愛知県）で磁器生産が盛んになり、国内磁器市場における肥前（現在の佐賀県・長崎県）の磁器産業の優位性が揺らぎはじめていた。
	18 世紀後半	海外貿易は衰退していた。
	1841 年	販売が再開された。海外輸出が変化し、営業が自由になった。
明治時代	1870 年	ドイツの化学者、ゴットフリード・ワグネルは西洋の化学を伝授するために有田に招かれた。焼成や染付の藍色を工業的に製造する方法などを伝授した。
		明治期の有田焼は、万国博覧会に出展された。
	1867 年	佐賀藩は幕府の要請で薩摩藩とともにパリの万博に参加した。出品された作品は大好評だった。そこで、総合商社機能を持つ、日本最初の貿易商社である起立工商会社が誕生した。
	1873 年～	万博へ積極的に参加することから、海外で有田焼の評価が上がった。
大正時代		需要が増大し、陶磁器の生産が伸びた。
	1896 年以来	陶磁器品評会が行われた。
	1916 年	「陶器市場」は協賛行事として公式に始まり、有田陶器市として発展し、現在に至っている。

昭和時代		不景気の影響を受け、また瀬戸地区（愛知県）や美濃地区（岐阜県）の陶磁業に価格面で押され、磁器生産は縮小し、失業者を生み出した。失業を機に、陶芸作家に転じる者が現れた。
	戦時中	統制経済が進み、窯元も軍需工場への転換を強いられた。
	戦後	生産量・売上共に大きく躍進した。
	1976 年	柿右衛門製陶技術保存会および色鍋島今右衛門技術保存会が国の重要無形文化財保持団体として認定された。
	1980 年	天狗谷窯跡、山辺田窯跡、原明窯跡、泉山磁石場跡が国の史跡に指定された。
平成時代	1991 年	上有田地区の町並みが国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。
現在		有田焼は、食器や美術工芸品の生産が中心であり、工業製品の製造も行われている。

2.3. 有田焼ができるまでのプロセス・主な表情を生む技法

有田焼ができるまでのプロセスは下図の通りである。

図 1：有田焼ができるまでのプロセス

有田焼の主な表情を生む技法を紹介する前に、日本の焼き物の表法を生む技法を以下の図で紹介する。

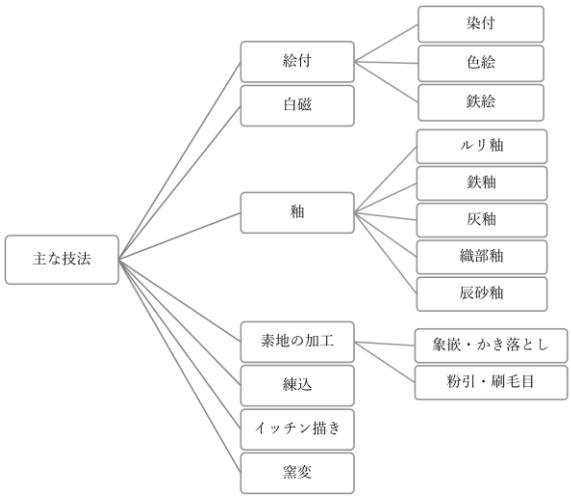


図 2：焼き物の主な表情を生む技法

表情を生む技法には、様々な技法があるが、有田焼の主な表情を生む技法として、絵付け、白磁、釉が主流である。絵付けでは、現代の印刷技術が取り入れられている。成形にもローラーマシーンを使ったオートメーションによる生産が行われている。そうすることで、さらに多様な製品を生み出している。

2.4.　有田焼の特徴

有田磁器の最も特徴的なことは、「今日存在する世界中のあらゆる磁製品のうち、石英粗面岩系原料を微粉枠砕して単味で用いる量産磁器は有田焼のみであることである。（中略）有田磁器は、原料・製法からみて一般の磁器と異なり、今日では唯一の例外ともいえる特殊なものである」（柴田 2001）。

焼き物の文様といえば、コマ、丸、雷といった幾何学文様、花、鳥、魚といった植物・動物の文様が多く見られる。有田焼の文様には、吉祥の文様が多く描かれている。描かれた文様には、幸福になりたいという願いが込められている。有田焼の文様の例としては、鶴、亀、松竹梅などがある。前掲の通り、有田焼の代表的な様式には古伊万里様式、柿右衛門様式、鍋島様式という 3 つの様式がある。この 3 つの様式について、十名（2011）は「意匠，製作工程上の技法においては多くの共通点をもつが，生産条件，需要者層，流通機 構を異にし，作品の形状，模様，配色，絵付け 技法などにおいては，それぞれ特色をもつ。それらが固有の美と技術を競いつつ，相互に作用し，刺激と影響を与えあい，重厚かつ華麗な伝 統を形成してきた」と述べている。次節以降、各様式を説明する。

2.4.1　古伊万里様式

古伊万里は，柿右衛門，鍋島を除いた江戸時代に焼かれた有田磁器のことであり、日本最古の磁器とされている。伊万里港から船で各地に出荷されていったため、伊万里焼と呼ばれていた。古伊万里の主な種類には白磁、染付、色絵、青磁、瑠璃釉、鉄釉がある。そして、染付による藍色と、上絵付による赤や金、緑、黄を組み合わせた配色で、重厚な装飾が特徴である。豪華な意匠で、優れたものが多い。

古伊万里様式で舟人物文、楼閣文、山水文、山水釣人文など中国風の題材や人物の文様、草花文などが多い。以下では古伊万里様式の製品を紹介する。

色絵　唐花文　輪花鉢

色絵　菊唐草文　小碗

染付　山水舟遊文　輪花皿

染付　楼閣詩句文　輪花皿

色絵　樹下人物文　大皿

染付　山水釣人文　八角皿

出典：佐賀県立九州陶磁文化館（2001）

2.4.2　柿右衛門様式

「柿右衛門様式」は「鍋島様式」とともに、日本磁器の双璧と言われ、ヨーロッパの王侯貴族や日本の大名家などへ向けた高級品であった。種類においては輪花皿や輪花鉢、長皿が多く作られる。特徴は白い素地に映える繊細な色絵である。文様から見ると、梅花文、唐草文、松竹梅文、牡丹唐草文、七宝繋文、龍文などが多く描かれている。また、山水文や桜花流水文、若葉文など様々なものが描かれるようになる。柿右衛門様式の製品には、色絵、染付、白磁がある。

「柿右衛門様式」は「典型的な柿右衛門様式」、「広義の柿右衛門様式」という 2 つの様式に分けられる。前者は柿右衛門家を中心に有田の南川原山（なんがわらやま）で作られたと言われている。乳白色の素地に余白を生かした絵付が特徴である。米のとぎ汁のような素地は「濁手」と呼ばれる。赤、緑、青、黄、黒、紫色のほか、金も用いられる。「典型的な柿右衛門様式」の影響を受けて主に有田内山（ありたうちやま）で作られた。濁手素地より青みが強い。以下では柿右衛門様式の製品を紹介する。

染付　桜花牡丹唐草文　輪花皿

染付　桜花流水松竹梅文　長皿

色絵　山水七宝繋文　扇形皿

色絵　山水人物龍文　長皿

色絵　花鳥文　六角壺

色絵　松竹梅文　燭台

出典：以上 6 点佐賀県立九州陶磁文化館（1997）

色絵　船人物文皿

色絵　松竹梅文輪花鉢

色絵　碁盤童子置物

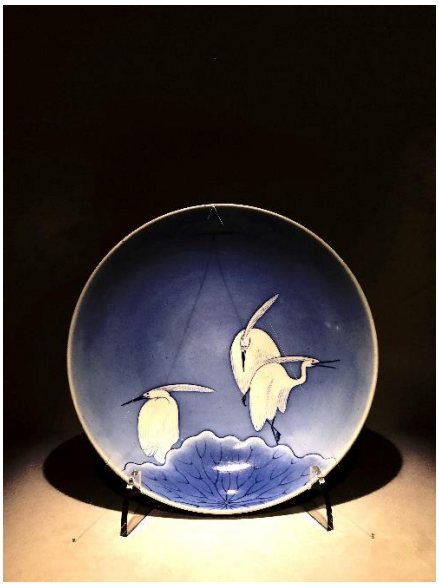
色絵　唐字獅子牡丹文十角皿

佐賀県立九州陶磁文化館（筆者撮影）

2.4.3　鍋島様式

「鍋島様式」は高度に洗練された技術やデザインが特徴であり、日本磁器の最高峰だと評価されている。1660 年に戦乱を経て中国は一時的に閉鎖されたため，中国の景徳鎮磁器の輸入が中断された。それをきっかけに、将軍家へ献上されることになった。そして、元禄～享保年間（1688～1736）ごろ最盛期を迎えた。文様は植物を中心に鳥や器物、幾何学文様などが描かれ、均一線描と大胆なデザインがある。色絵には基本的に赤、緑（薄青)、黄の 3 色が使われる。以下では鍋島様式の製品を紹介する。

色絵椿文皿染



付鷺文三足大皿

佐賀県立九州陶磁文化館（筆者撮影）

2.5.　地域発展への価値

ここでは、有田焼に関する史跡などを紹介する。

重要伝統的建造物群保存地区

出典：https://www.pref.saga.lg.jp/kiji0031704/index.html

「重要伝統的建造物群保存地区」

1616 年ごろ朝鮮の磁器の技術者・金ヶ江三兵衛が有田で磁器の原料を発見した。そのことにより、有田は日本で初めて磁器の産地になった。それに、「有田千軒」と呼ばれた街並みには歴史的価値の高い建造物が数多く残っており，1991 年に「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されている。

「泉山陶石場」

有田焼の原料となる陶石の採掘場跡は日本の磁器生産に関する遺跡として国指定史跡となっている。

泉山陶石場

出典：https://www.arita.jp/spot/post_16.html

「陶山神社および李参平の碑」

陶山神社は泉山の陶石を発見し、国内で初めて磁器を焼いた有田焼の陶祖･李参平を祀るために 1658 年に建立された。神社には、有田焼の大鳥居や狛犬、大水瓶、玉垣などが並ぶ。

陶山神社および李参平の碑

出典：https://www.arita.jp/spot/post_22.html

「李参平の碑」

李参平の碑は陶祖李参平の記念碑である。1917 年に有田焼 300 年を記念して建てられました。

李参平の碑

出典：https://www.arita.jp/spot/post_21.html

有田田ポーセリンパーク
出典：https://www.arita.jp/spot/post_4.html

「有田田ポーセリンパーク 」

ドイツ・ドレスデンのツヴィンガー宮殿を再現した有田焼の豪華なギャラリーである。宮殿内部には幕末から明治期にかけての第二次輸出期の作品を展示されている。中にもウィーン万博に出品され大花瓶（182 ㎝）がある。有田田ポーセリンパークが有田焼産地における観光開発事業の先鞭をつけたのであると言われている。

有田陶器市（筆者撮影）

「有田陶器市」

明治 29 年（1896 年）、深川栄左衛門と田代呈一が主催として陶磁器品評会を開いた。その後、この品評会と同時に開催されるようになった陶器市が始まった。毎年 4 月 29 日～5 月 5 日の会期中は、町内にわたって店が並び、多種多様で、安い製品が売れる。磁器製品の安さ、豊富さ、そして独特の活気が毎年多くの人々を有田へと誘う。

3. ベトナムのバッチャン焼　歴史及び特徴・地域発展への価値を中心に

3.1.　バッチャン焼とは何か

ベトナムの焼き物は 1 万年近く前から始まった。特に、リー朝（1010 年～1225 年)、チャン朝（1226 年～1400 年)、レ朝（1428 年～1527 年)、マック朝（1527 年～1592 年）に、器種と釉薬の色において多種多様なものが生産されていた。国内に向けた製品だけでなく、海外輸出されており、発展するようになった。ベトナムの焼き物といえば、バッチャン焼が有名である。バッチャン焼はバッチャン村で生産され、15 世紀ごろに始まった。バッチャン村はハノイ、ザーラム郡に位置し、ベトナムの最も有名な陶磁器生産の村の一つである。

3.2.　バッチャン焼の注目すべき歩み

バッチャン焼の注目すべき歩みは以下の通りである。

表 4：バッチャン焼の歩み

時代	年代	主な出来事
リー朝	1010 年	リコンウアン王がニンビン省ホアルー 地区からタンロン（現在のハノイ）に遷都した。タンロンはベトナムの経済・文化の中心地になった。バッチャン村は商業発展に適した位置であり、焼き物の生産に良質の土が発見された。陶磁器生産地のバッチャンは 15 世紀ごろ、陶器の村として記録に残っている。
レ朝～マック朝	1428　年 ～ 1592 年	バッチャン村が発展し、バッチャン焼が普及していった。
	1371 年	中国の明朝（1368 年～1644 年）は 1371 年に、外国貿易の禁止を提唱したため、中国陶磁器の輸出が制限された。これをきっかけに、ベトナム陶磁器が東南アジアの市場に拡大していた。
	1604 ～ 1634 年	日越間の貿易が特に発展し、ベトナムの陶磁器は日本に大量に輸入された。
	16～17 世紀	ポルトガル、オランダ、イングランド、フランスなどがアジアで会社を設立し、東南アジアでの海上貿易活動がより活発になった。バッチャン焼が繁栄を極めた。
		オランダの東インド会社（VOC）により、ベトナムの陶磁器がアジアや日本に輸出された。
	17 世紀末	清が台湾を奪回し、渡航禁止条例を撤廃したのをうけ、良質の中国産陶器が海外に大量に流出し始めた。完成度の高い中国陶磁器に、ベトナム陶磁器 は太刀打ちできない。アジア市場でのベトナム陶磁器が急激に減少した。
	18～19 世紀	経済状況の影響で、バッチャン焼が減少した。しかしながら、

		大きな国内需要に支えられて存続している。
現在		バッチャン焼がますます多種多様になった。国内の市場だけでなく、海外にも輸出されている。

3.3. バッチャン焼ができるまでのプロセス・主な表情を生む技法

バッチャン焼ができるまでのプロセスを下図で表す。

図 3：バッチャン焼ができるまでのプロセス

有田焼と比べて、バッチャン焼ができるまでのプロセスが少し違う。プロセスでの違いは完成品の違いにつながるはずである。しかし、本研究では、資料が不足しているため、今後の課題にしたいと思う。

絵付け、白磁、釉といった技法が主流している有田焼に対して、バッチャン焼の主な表情を生む技法は絵付けである。焼き物を作るのは主に手仕事なので、陶芸家の創造性が明確に表われている。

3.4. バッチャン焼の特徴

3.4.1　バッチャン焼の製品の分類

バッチャン焼の製品は日用品、崇拝用品、装飾用品、建設用に分類されている。日用品といえば、主に大小皿、碗、花瓶、ボウル、茶碗、カップ、酒瓶などがある。

3.4.2　文様

バッチャン焼に描かれた文様は様々である。主に植物（花、ロータス、葉、米、ラン、きく）、動物（龍、フェニックス、鳥、馬、魚、ベトナムの Nghe、Hac）、人、田舎の生活、山水画がある。他にも、中国の神話による四霊、松竹梅、 魚を引っ張る漁師、竹と鳥というデザインも見える。バッチャン焼の文様に関して、グェン（2020）は「現在、バッチャン焼の絵柄は沢山あるが、伝統的にトンボや菊の花、蓮の花、竹、金魚、芋などの身近な自然をモチーフにした物が絵柄として多く描かれた」と述べている。以下、いくつかのバッチャン焼を紹介する。

Đĩa gốm sứ Bát Tràng vẽ hoa mai

Tượng phật Di Lặc Vạn Sự Như Ý

Lọ hoa gốm Bát Tràng đắp nổi hoa mẫu đơn

Lọ hoa sứ sơn mài cảnh làng quê

Bộ bát đĩa Bát Tràng cánh tiên men kem vẽ sen hồng

Tranh sứ tứ quý Xuân Hạ Thu Đông

出典：https://gomsubattrang.vn/

3.5　地域発展への価値

ここではバッチャン焼に関する史跡などを紹介する。

「バッチャン村」

バッチャン村はやきものの生産地として観光地化されている。観光客は観光を鑑賞しり、素敵な店に訪問したり、絵付けを体験したりすることができる。

バッチャン村の様子

出典：https://hanoimoi.com.vn/tin-tuc/Du-lich/1027986/kham-pha-thu-vi-ve-lang-gom-bat-trang

バッチャン村

出典：https://congthuong.vn/lang-gom-bat-trang-xanh-hon-nho-cong-nghe-140631.html

「バッチャン陶芸博物館」

バッチャン陶芸博物館は2018年から建築され、2022年正式に開業した。観客はバッチャン焼の製品を鑑賞したり、バッチャン焼ができるまでのプロセスを見学したりすることができる。のみならず、自分でやきものを作ることもできる。

バッチャン陶芸博物館

出典：https://nhandan.vn/dong-chay/doc-dao-bao-tang-gom-bat-trang--641619/

4. 考察

4.1　有田焼とバッチャン焼の類似点

上記から、有田焼とバッチャン焼の間に類似点が数多くあることがわかった。

まず、両者は長く、輝く歴史を持つことである。バッチャン焼は 15 世紀ごろに、有田焼は 17 世紀ごろに始まった。時が経つにつれて変遷する出来事が多くあったが、大きな国内需要に支えられて今まで生きている。有田焼から見ると、1644 年の中国の内乱をきっかけに大きく発展し、優れた磁器を作り出すようになった。国内の市場を独占しただけでなく、海外にも輸出した。しかし、19 世紀初め、美濃地区（岐阜県）や瀬戸地区（愛知県）で磁器生産が盛んになり、また関西でも様々な磁器生産が行われるようになったため、国内磁器市場における有田を中心とする肥前（現在の佐賀県・長崎県）の磁器産業の優位性が揺らぎはじめていた。明治時代に入ると、有田焼がまた発展し、高評価を得た。一方、バッチャン焼は 1428 年～1592 年発展し、普及していった。その後、国内だけでなく、アジアや日本に輸出された。17 世紀以降、中国磁器の拡大や経営状況の影響で、バッチャン焼が減少した。だが、大きな国内需要に支えられて存続し、今日はますます多種多様になっている。

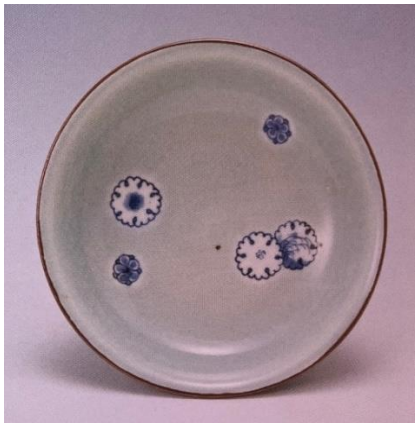
次に、バッチャン村と有田で原料となる良質な土が発見され、それにより、陶磁器が生産されて、すぐに国の代表な焼き物になっていることが挙げられる。有田焼の場合は、朝鮮の磁器の技術者・金ヶ江三兵衛により泉山で豊富で良質な原料が発見された。泉山陶石は有田焼の原点であり、今でも有田焼の重要な原料である。バッチャン焼の場合は、リー朝の時代には、焼き物の生産に良質の土が発見され、バッチャン村が発展し、バッチャン焼が普及していった。

それから、中国の混乱をきっかけに、市場が拡大していった。国内の市場だけでなく、海外にも輸出されて、評価を得た。1644 年明から清へ王朝が交代という中国の内乱が起こった。北からの清朝によりペキンが陥落した。明の遺臣たちが清朝に抵抗したため、内乱状態になった。そのため、中国の窯は戦乱で疲弊し、海外輸出は激減した。その結果、日本も中国磁器の輸入がほとんど止まった。それを機に、有田焼は国内磁器市場を独占する製品となった。国内の磁器市場を独占するだけでなく、海外の磁器需要にも応え、様々な器種、形、文様の磁器を作った。中国磁器の輸出激減は日本だけでなく、それまで中国磁器を輸入していたベトナムも影響を受けた。それで、元々国内市場で普及していったバッチャンも東南アジアの市場に拡大した。

そして、VOC により海外に輸出されたのが共通点の 1 つである。VOC とは Vereenigde Oostindische Compagnie（オランダ東インド会社）の略称である。VOC は 1602 年に設立され、目標はまず高級香料を産するマルク諸島であった。それから、一部地域で香料の強制栽培を開始していったが、それだけでは生産が伸びないことを認識し、現地で需要の高い産品の輸入に取り組んだ。バッチャン焼は VOC により日本に輸出され、逆に有田焼は VOC により、ベトナムを含む東南アジアへ輸出された。VOC により、バッチャン焼、また有田焼は国内市場に止めずに海外市場にも進出でき、さらに発展していった。

また、前掲の有田焼やバッチャン焼の特徴から、文様にも類似点が多くある。両者は花、草（植物）や鳥（動物）、山水文、山水人物文、いわゆる自然の文様が多い。特に、松竹梅文や龍文が有田焼とバッチャン焼によく見える。それに、雲割花鳥山水文の作品もある。柴田（2001）は「中国磁器の意匠を手本として作られたものが多い」　述べている。文様での類似点は中国からの影響を受けたためと考えている。よく似た文様の写真は以下紹介する。

バッチャン焼　　有田焼



バッチャン焼出典：https://gomsubattrang.vn/
有田焼出典：佐賀県立九州陶磁文化館（2001）

最後に、有田焼が生産された有田、バッチャン焼が生産されたバッチャン村は、どちらも生産地として観光地化しており、国内外からの観光客に恵まれている。

4.2. 有田焼とバッチャン焼の相違点

類似点とともに、有田焼とバッチャン焼の間には相違点がある。

まず、有田焼は「古伊万里」、「柿右衛門様式」、「鍋島様式」という 3 つの様式に分けられ、それぞれの様式は異なる特徴を持つことに対して、バッチャン焼は様式ごとに分けられない。

次に、文様が違う。バッチャン焼は nghe,hac といったベトナム風の文様がある。一方で、有田焼は日本独自の意匠がある。有田焼は中国磁器からの脱皮し、和様（日本風）の意匠が盛んになった。17 世紀前半に中国・景徳鎮磁器といった中国磁器の意匠を手本として作られたものが多いが、多種多様な文様では和様のものもある。例えば、藤花、銀杏の葉、桐、双鶴文、団鶴文、菊流水などである。そして、1650 年～1670 年代には、日本独自の意匠が次々に出現する。雪輪、波千鳥、富士山、若松、ワラビ、雨降などがある。また、1670 年～1690 年代に婦人像や若衆人形、相撲人形といった様々な人物を題材とした製品が作られた。野上（2005）は「17 世紀中頃の技術革新によって、有田磁器は中国磁器と同等品となり、さらには国内需要に対して文様の和様化を図り、中国磁器とは異なる独自のスタイルを確立するようになった。その背景には単なる技術的な問題だけではなく、技術革新と海外輸出の本格化がもたらした肥前全体の質的な分業により、多様な需要をより反映しやすくなったことがあげられる」と述べている。以下では日本風の文様を持つ製品を紹介する。

色絵　菱割鶴若松文　蓋付碗

染付　松原文　富士山形小皿

色絵　桜花鷲文　大皿

染付桜文　折紙形皿

出典：佐賀県立九州陶磁文化館（1997）

同じように中国から影響を与えられたが、両国の陶芸家は自分の国の文化を合わせて、独自の焼き物を生み出した。グローバル化が急激に進んでいる世界では、他国の技術や文化を吸収、自国の価値観や文化を維持することが重要だと考えている。

5. おわり

5.1　まとめと今後の課題

本研究では、有田焼とバッチャン焼を歴史・特徴・地域発展への価値を中心として、解説した。それを踏まえて、有田焼とバッチャン焼の類似点および相違点を明らかにした。また、17 世紀の日越間の陶磁器貿易から、日本とベトナムは昔から良好な関係を構築したことがわかる。これからも一層良関係を作るのを期待している。

今回の研究では、主に先行研究を踏まえて研究を行った。技術や美術は深く検討しなかった。そして、陶磁器から日越関係を考察した上で、有田焼とバッチャン焼だけでなく、両国すべての焼き物について研究を行う必要があると考えている。それは今後の課題にしたいと思う。

謝辞

本論文は最初から完成までのあたり、適切なアドバイスをくださり、また丁寧な指導をしてくださった吉川先生に感謝を申し上げます。

参考文献

1. 河野 恵美子（2017）『ゼロから分かる！ やきもの入門 』世界文化社
2. 佐賀県立九州陶磁文化館（1995）『世界・焱の博覧会プレイベント　柴田コレクションIV －古伊万里様式の成立と展開－』
3. 佐賀県立九州陶磁文化館（1997）『寄贈記念　柴田コレクション V　－延宝様式の成と展開－』
4. 柴田明彦（2001）「初期の有田焼－朝鮮半島系磁器製造技術による有田磁器の始まりと終焉」佐賀県立九州陶磁文化館『寄贈記念　柴田コレクションVII　－17 世紀、有田磁器の真髄－』
5. 外山徹（2012）「伝統工芸有田焼の商品開発動向-歴史的前提から第 2 次 大戦後・現代まで」『明治大学博物館研究報告』
6. 十名直喜（2011）「伊万里・有田焼の産業振興とまちづくり ：産業と 地域，伝統と創造のダイナミズム」『名古屋学院大学論集　社会科学篇』
7. 野上建紀（2005）「有田の文様－17 世紀中頃～後半の窯場の様相と文様 の変化」『金大考古』
8. Nguyen Thi Lan Anh（2020）「バッチャン焼の過去と現在」『多文化社会研究』
9. Nguyen Thi Lan Anh (2009)「Vai trò của gốm sứ Nhật Bản trong văn hóa đời sống」『USSH - Master Theses』
10. Nguyen Thi Tuong Van (2013) 「Gốm sứ trong quan hệ giao thương Việt Nam - Nhật Bản thế kỷ XVII」『USSH - Master Theses』
11. Phan Huy Le 他(1995）『Bat Trang Ceramics 14th・19th centuries』The gioi publishers
12. 有田観光協会　ありたさんぽウェブサイト
https://www.arita.jp/aritaware/
13. 日本遺産　ポータルサイト
http://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/
14. Gallery Japan ウェブサイト
https://galleryjapan.com/locale/ja_JP/technique/ceramics/
15. Nippon.com ウェブサイト
https://www.nippon.com/ja/features/c00105/